

主論文の要約

(Abstract of Dissertation)

論文題目： 「非物質文化遺産」の保護における協働関係—中国甘粛省の事例を通じて

氏名： 趙 歆

論文内容の要約：

2004年、中国政府はユネスコの「無形文化遺産の保護に関する条約」に加盟した。その後、「非物質文化遺産」(無形文化遺産の中国語訳)の調査や記録の作成、分類、整理を進め、その保護システムを構築してきた。しかし、今日、この非物質文化遺産に関する法律や政策で規定された認定基準と保護手法などをめぐって、様々な制度的・実践的課題が存在する。

本論文は、中国の非物質文化遺産保護の実際を分析し、その課題と展望を考察した。とくに、甘粛省の各地域(西部・中部・南部)における非物質文化遺産を事例として、通時的・共時的に比較検討した。甘粛省は中国の他の省に比べて経済発展が遅れているが、歴史的に古い土地柄で、有形・無形の文化遺産が数多く存在する。具体的には、①敦煌市の壁画模写と彫像の技法、②張掖市の「河西宝卷」、③西和県の「乞巧節」という3つの非物質文化遺産の事例を研究対象とした。これら異なる種類の非物質文化遺産(①伝統美術/工芸、②口承文学、③年中行事/民間信仰)を取り上げることによって、甘粛省における保護の現状を総体的に把握することを試みた。

先行研究では、ユネスコの「無形文化遺産」という概念、そして中国や日本等におけるその概念の導入と変容について検討されている(周超2012、才津2008)。そして、このような無形文化遺産の保護に対して、研究者はどのように対応し、参与すべきかに関する考察もある(西村2017、菅2010、戸2015、呂2015)。しかし、中国の非物質文化遺産保護の現状について、具体的事例を通じて明らかにした研究は少ない。また、その実践に見合うような理論的考察もまだ十分にされていない。

本研究の方法論として、2015年から2018年までの間、筆者は上述の甘粛省の3つの地域で計6回にわたって現地調査を行い、参与観察とともに、文化の担い手たちや関係者に聞き取りを行なった。文献資料とともに、このフィールドワークの調査結果を分析し、現在の中国における非物質文化遺産保護の現状と課題を考察した。そのうえで、現在の課題を解決するためには、現地の传承人や住民、知識人、行政、研究者など各関係者の協働(collaboration)の構築が重要であることを明らかにした。

本論文は序章、第1章から第5章、そして終章より構成されている。

第1章では、「世界遺産」と「無形文化遺産」に関する歴史的背景を概観し、「無形文化遺産」が中国で受容された経緯、そして「非物質文化遺産」の登場について説明した。とくに、中国の有形文化遺産と対照させて無形文化遺産の保護政策、および非物質文化遺産の中国における位置づけを論じた。さらに、甘粛省における非物質文化遺産の全体像を把握し、その特徴を明らかにした。

第2章では、まず非物質文化遺産の保護に関する法律・政策面の問題点を整理した。次に、近年の人文・社会科学における「公共」に関する研究、新しく提唱された「公共民俗学」、「実践民俗学」について説明した。これらの動向から、現在の人文・社会科学分野では、社会や実践と結びついた研究が目立っており、そこでは「協働」の概念が重要であることを指摘した。このことは、非物質文化遺産に関する民俗学研究にも通じている。そして、本章の最後で、甘粛省の非物質文化遺産に関する先行研究で明らかにされていない部分を説明した。

次の第3章から第5章は、本論文の事例分析にあたる。甘粛省の都市部と農村部における非物質文化

遺産の歴史と現状を通時的・共時的に考察し、比較した。

第3章では、敦煌市における省レベルの非物質文化遺産である壁画模写と彫像の二つの技法について考察した。この二つの技法は、敦煌遺跡の壁画と彫像を再生するために敦厚研究院を中心に培われてきたが、各担い手やその技法の認定、保護の現状はそれぞれ異なっている。伝統美術・工芸の技法として非物質文化遺産に認定されにくい状況があり、保護活動はあまり展開されていない。また、担い手たちや政府との間で、研究者はあまり保護事業に参加していないことが分かった。

第4章では、張掖市における「河西宝巻」という口承文学の現状を検討した。河西宝巻は近年、省レベルから国レベルの非物質文化遺産に認定された。河西宝巻の保護事業は、従来、行政と伝承人との間であまり円滑に進んでいなかった。しかし、近年、詠唱活動のイベントの開催を通じて、伝承人や地元との関係が改善されている。従来、河西宝巻を専ら民間文学の観点から研究していた研究者も、非物質文化遺産としての宝巻のイベントに参加した。こうして、伝承者、現地住民・知識人、政府、研究者などの間で、非物質文化遺産の保護にむけて連携と協働が見られ始めたことを明らかにした。

第5章は、西和県の年中行事である乞巧節の現状について考察した。国レベルの非物質文化遺産としての乞巧節に関わる現地の人々の見解や現在の課題などを論じた。また、3つの村での乞巧節を比較し、保護政策の現状と住民参加の状況について分析した。これらの事例で、研究者は非物質文化遺産の調査や認定の過程に積極的に関わったが、その後の保護活動の行事にはほぼ参加していないことが明らかになった。そのため、保護事業では行政の介入が強く、また行事における新たな現象が見過ごされていることを指摘した。

終章では、以上の各章の結論をまとめ、現存する問題と解決策を提示した。まず、壁画模写技法と彫像の技法・河西宝巻・乞巧節のそれぞれが地域の伝統文化から非物質文化遺産へと認定された過程と保護の現状を比較考察し、その要因と課題についてまとめた。各章で論じたように、同じ甘粛省内でも各々の非物質文化遺産の保護状況は様ではなく、政府からの援助や支持、担い手の態度、社会・研究者との連携がそれぞれ異なる。現在、甘粛省自身の経済的基盤は弱く、文化遺産保護の財源は主に中央政府からの補助金である。省レベルとそれ以下のレベルの非物質文化遺産はほぼ補助金が出なかった。市場経済や観光はあまり活発ではないため、甘粛省の非物質文化遺産が商品化、観光化された事例は一般的に少ない。ただし、本論文で取り上げた西和県の場合は、現地の政府・文化部門の支持もあり、非物質文化遺産が街づくり、そして経済（観光業など）と関わっており、担い手や現地住民に一定の利益をもたらしてきたといえる。したがって、財政不足と行政の介入は甘粛省の非物質文化遺産保護における基本的な特徴と言える。本文で検討した3つの事例は、中国社会における非物質文化遺産保護のそれぞれ異なる段階と状況を示している。調査によって、各文化遺産の歴史的背景や政策、官僚の志向、担い手の見解といった各要因が関わっていることが明らかになった。

以上の検討を通じて、中国の非物質文化遺産保護における問題は主に次の二点に集約される。つまり、1)「非物質文化遺産」の認識が定まっておらず、認定に影響を与えていること。2)非物質文化遺産に関する制度や支援がまだ十分でないため、保護事業が必ずしも円滑に進んでないこと、である。このような問題を解決するために、本論文では近年の人文・社会科学の課題、特に「公共民俗学」や「実践民俗学」などの視点・方法論を参照した。これらの立場はそれぞれ異なっているが、いずれも重要な示唆を投げかけている。つまり、非物質文化遺産の保護において、民俗学者などの研究者は独自の役割を果たし得るといえる点である。

上述のように、第5章で分析した乞巧節の場合、研究者を含む各関係者は非物質文化遺産の認定段階で積極的な役割を果たしたが、その後の保護事業に研究者はほぼ参加していなかった。非物質文化遺産の保護を円滑に進めるには、伝承人、現地住民、政府、研究者、現地知識人など各関係者の協働的な取り組みが重要であろう。本論文で分析した甘粛省の三つの非物質文化遺産の事例では、現在、いずれも協働関係が広く展開されていない状況が明らかとなった。

研究者は地元知識人や地元コミュニティと連携し、非物質文化遺産の知識や保護を行政や一般社会に伝えることによって、この協働関係の構築に貢献できると考える。専門のディシプリンや学問の壁に閉じこもらずに、政府や文化の担い手、現地住民たちと協働することが課題となろう。とくに地元の知識人は、伝承人とともに現地の文化保護においてしばしば重要な役割を果たしてきたことから、彼らとのパートナーシップが期待される。

その際、研究者は非物質文化遺産の保護において、文化の担い手や現地住民とより平等な姿勢で接し、

彼らの視点とニーズを考慮して現存する問題に取り組むべきであろう。非物質文化遺産は担い手たちやローカルなアイデンティティと緊密な関係がある。非物質文化遺産の「本来の形」あるいは「真正性」の保存にとどまらず、彼らがその「伝統」を強調する理由や背景、そして彼らの暮らしや人生にもつ意義への考慮も必要である。研究者は柔軟な研究アプローチによって、文化の担い手の主体性と想像力、日常生活と文化的実践、現地社会の利益を尊重することが重要である。

以上のように、非物質文化遺産の登場は学術研究に重要で新たな文脈を提供してきた。中国の非物質文化遺産の保護は、関係者の積極的な協働の構築を通じて問題を解決し、人々は自らの文化的伝統を継承する力が養成されると思われる。本論文での考察が甘粛省のみではなく、中国の他地域の非物質文化遺産保護に対しても参考となることを願う。